

コメントとディスカッションの記録*

日 時：2016 年 5 月 21 日(土)15:45～17:00
共 催：日本都市学会
場 所：専修大学神田キャンパス 5 号館 4 階 542 教室

- 司 会● 野坂 真 (早稲田大学大学院)
- コメント● 吉見俊哉 (東京大学)
近森高明 (慶應義塾大学)
- 討 論● 杉平 敦 (本会若手研究会)
松橋達矢 (日本大学)
中島直人 (東京大学)

所属役職等はシンポジウム開催時のもの

司 会 それではコメンテーターの先生方から、3 本のご報告について、あるいはご自身の中で丸の内の景観に関して
お考えになっていることなど、コメントをお願いします。

吉 見 東京大学の吉見でございます。こういう場にお招きいただきありがとうございます。いま 3 人の報告をお聞き
して大変勉強になりました。丸の内、東京駅、特に皇居前広場については私自身も関心を持って若干書いたりしてきたので
すが、本当に知らないことが多くて、ずいぶん勉強させていただいたと思っております。

自分の記憶をさかのぼりますと、この地域、特に皇居前広場に関しては思い出があります。1989 年に天皇が亡くなられた
ときに僕は天皇の死についての調査をしていました。皇居前広場に来た人たちのインタビュー調査を学生たちと一緒にやっ
ていたのですが、数日やったら捕まりまして、「あなた何をやっているの? プレスの人?」と聞かれました。「いえ違います、ここで学
生たちと調査しています」と言うと、「ちょっと来て」と言われて装甲車みたいところに連れて行かれて、手荷物を全部検査さ
れて、「とにかくやっちゃいかん」と言われました。

ちょっと抵抗を試みたのですが、公務執行妨害で捕まって新聞種になるのはまずいと思って、そのまま引き下がって調査
はそれで終わったというのをよく覚えております。やはり権力というか権威というか、ある力が働いている空間だということは
1989 年の時点でも身をもって経験しました。ただ、きょうのメインテーマはその話ではなくて景観ということ。3 人のお話
をお聞きしながら 5 点ほど私が感じたことをお話しさせていただきたいと思えます。

第一点。景観というと、たぶんランドスケープですよ。普通そのランドスケープは誰かにとってのランドスケープであり、し
ばしばそれは住民、つまり住んでいる人たちにとってのランドスケープなのですが、丸の内の場合、その特徴は住民がいない
ということ。多少はいるかもしれませんが、基本的には住民からのランドスケープということの議論が、丸の内に関して言
えばほとんど成り立ちません。市民はいると思いますが、住んでいる人は極めて限られているということです。

* 関東都市学会 2016 年度春季大会シンポジウム特集稿<その 5>
[文責] 杉平 敦 (関東都市学会若手研究会)

本稿の写真はカラー仕様の原稿を用いて執筆されたものである

そうだとすると、住民がいないところでのランドスケープというものはいったい何なのか、それは誰からのまなざしなのか、誰からの風景なのかということが、杉平さんのお話にもありましたように当然問題になってくるわけです。それは天皇のまなざしなのか、それともそこに来た来訪者、例えば観光客、特に外国人観光客などのまなざしなのか、それともそこで働いているビジネスマンのまなざしなのか、いったい誰にとっての風景が問題になっているのかということが所与ではないということになります。

これがつまり、丸の内について景観ということを議論するときの難しさとおもしろさ、杉平さんが盛んにおっしゃっていましたが、知的なおもしろさだと思います。したがって丸の内という極めて特殊な空間における景観はいったい誰の景観なのかということ、これからも繰り返し議論していく必要があると思います。これが第一点です。

第二点は、それぞれの方のご報告に関わってまいります。杉平さんのご報告は、個別的には大変勉強になって共感するところがずいぶんあったのですが、何度か「官と民が本来ならば対立しているはずなのに対立が見えてこない」という言い方をされてきました。これが僕の感覚とちょっと違うのです。

この場合、民というのは企業ですね。資本というか三菱だったりするわけです。それから官は東京都だったりするわけですが、この官と民が本来ならば対立しているはずという感覚は私にはなくて、本来そもそもそんなに対立していないのではないかと私には感じられます。ですから、なぜ「本来ならば対立しているはず」と言えるのか、ちょっとよくわかりませんでした。

どうということかと言いますと、例えば1960年代の美観論争にしても、確かに皇居への配慮を重視する保守派が一方にあり、他方には近代化・産業化の中でオリンピック後の東京を新たにつくり替えていくという革新派がいて、その対立があったというのは事実でしょう。しかしながら、ひょっとしたらこの保守派というのは世代的に割と年長であったかもしれません。革新派はまた違う世代層からできていたかもしれません。その立場も「官」「民」と対応していたのかどうか、あるいは必然的にそれと対応することであったのかどうか、それがちょっとよくわかりませんでした。

1980年代になっても、杉平さんの議論は官 vs 民ということで構成されているので、「官」が秩序・風格・歴史性を支持する側、「民」が合理性・機能性・新規性を支持する側となっているのですが、そうなのかなという気がちょっとするのです。

この議論ですと、90年代以降、「三菱側」と「東京側」がすり寄ってくるかのように見えるのですが、そもそもそれらは一体であったかもしれません。「開発」と「保存」という両方の路線が、官の側にも民の側にも両方あって、官 vs 民ではなくて、しかも開発 vs 保全ですらなくて、この地域を構築していくときの異なるモメントが常に複合していた、対立というよりも最初から矛盾をはらんだ複合のプロセスとして、この地域に関しては見たほうがいいのかという気がしました。

現在の大規模再開発についても、何かが破れて大丸有(まちづくり協議会)による開発に向かっていったというイメージとは、少し違うイメージを僕は持ちました。その辺は後で議論をさせていただければと思います。

三点目は、松橋さんの第二報告についてですが、本当に勉強になりました。都心というのはいろいろな意味での中心なのですが、三つぐらい違う資源があるわけです。一つは権威の中心ということがあり、それは皇居であったりします。それから資本の中心、人口の中心など、それぞれ異なる資源があります。

この関係が必ずしもすっきりしないで矛盾を含んでくるわけですが、今日の松橋さんの議論の中では、開発のロジックというか資本の集積のロジックは、ある種の一本筋の面があります。しかし、それに対抗していくロジックは変わってきているという議論でもあったと思うのです。つまり天皇に対して畏れ多いということが1970～1980年代ぐらいまであったかもしれません。60年代までは特にあったかもしれません。それがある時点から消えていくとおっしゃっていました。消えていったときに何がそれに代わって行って、高層化などに対する対抗の論理になってくるのかという、この議論はとてもおもしろいものでした。

一つは、歴史的景観、歴史的伝統というものがあります。ICOMOS(国際記念物遺跡会議；UNESCOの諮問機関)のヴェニス憲章(1964年に採択された歴史的建造物の保存と修復に関する憲章)の話にもあるように、むしろ国際的な規範やグローバルな価値のようなものが出てきます。つまり天皇の権威が必ずしも開発に対抗する論理ではなくなっていったときに、それに代わって出てくるものはいったい何だったのかということが、とてもおもしろいと思います。それは歴史的な伝統なのか、それとも国際的な規範なのか、その部分のロジックにはどういふものがあり得るのか、そういったお話をもう少しお聞きしたいと思います。

中島さんのお話については、触発された点を二点ほど申し上げたいと思います。一つは、きょうの本題からは少し離れるの

ですが、都市美協会の戦後の活動で、皇居の開放というものを相当考えていたということです。つまり皇居を国民にとっての緑あふれる広場にしていくという構想が都市美協会の運動の中にもあったという話です。これはとてもわかりやすいものでした。

皇居前広場の感覚は、いまと1940～50年代とはまったく違います。1940年代末の皇居前広場で、共産党がメーデーの大集会をやっている写真があります。それから、50年代初頭か40年代末の皇居前広場で、デモ隊が警官隊を追いかけしている写真も残っています。逆ではありません。警官隊がデモ隊を追いかけているのではなくて、デモ隊が警官隊に暴力を振るおうとして、警官隊は危ないと言って慌てて逃げているのです。向こうのほうに第一生命ビルが写っていますので、皇居前広場から第一生命ビルのほうを見たところですよ。

また、同時期に残されたおもしろい写真があります。デモ隊が警官隊を追いかけしている乱闘の風景を、横の高いビルから占領軍の兵士たちが眺めているという構図です。

つまり天皇という権威が一瞬消えたときに、戦後の東京の中心部の空間をいったい誰が占めていくのか、新たな中心を誰がつくっていくのかということが非常に問題になったということです。

松橋さんのお話の最後のほうで、もう一回、市民の介入の場が問題になるという話がありました。それとも関わるのですが、現在の都心部、丸の内に関して言えば、中空の高い部分というのは容積率の問題がもろに掛かってきますから、グローバル資本主義と直結していて、なかなか市民の介入とかそういうレベルで物事は動きません。むしろ巨大な資本のシステムのレベルで動いているので、そこでの市民の介入の場というのは、現実的に考えるとそんなにあるわけはありません。しかし景観というか足下の部分というのは、かなり自由度が出てきて、いろいろな可能性、いろいろな協議、交渉、ネゴシエーションの場が出てきます。

そのときに、いまの広場という話に関して言いますと、空間の景観ということを超えて、空間の使用、空間そのものを使うということが問題になります。どう見えるかということを超えて、アクセシビリティが問われるのです。その空間に来る市民あるいは学生やいろいろな人々は、もちろん地代を払うほどリッチではありません。しかも不法に占拠できるような場でもないので、捕まってしまうようなことはあまりできません。だからこそ、そこからもう一歩進んで、パブリックな空間を合法的に使用できるような仕組みがどのようにできていくか、そういう問いが足下のレベルで生まれるのではないのでしょうか。だから「景観を超えて」ということで言うと、使用というレベルの問題が足下のレベルであるのではないかと、四番目にお話しさせていただければと思います。

五点目。中島さんのご指摘の中でとても重要な問いが最後に出されていたと思います。これは景観という概念そのものに関わってくる問いです。景観というのはけっこう曖昧な概念というか、主体は住民であるという明確な図式を取り去った瞬間に、いったい景観の主体は誰なのだという問いが常に起きてきます。でも主体はけっこう空白で、いろいろな条件を持ってきうるわけです。その中で時間軸というものがますます重要になってきています。

つまり私たちは景観というものを、目の前に見える風景の問題として捉えがちです。特にスカイラインの話なんかですと、そういう話になっていきます。しかしながら、いま足下の風景というのが、ある意味で交渉可能とかネゴシエーションなものになってきているとすると、そのときに自分たちの記憶、歴史、都市の時間といったものを、どのようにその場の中に再現というか空間化というか、要するにリアライズしていくかということが現実的な課題や問いになってきています。

そこはまだ議論できる場所です。2010年代以降に景観論争をするのであれば、これが杉平さんの問題提起だと思



うのですが、僕は中島さんが最後に提起された時間軸の問題を抜きにしては議論できないと思います。そういう意味ではおもしろい提案だと思います。いかなる都市の歴史をそこに共同的、集合的に創造するのかということです。

それは虚構だからいけないということではないと思います。実際に東京という都市は薩長が南から攻めてきて、幕臣たちが東北に逃れていって、そのあと薩長が近代東京という歴史的空間、時間をつくっていったわけです。そうすると江戸時代の幕府の時間と記憶は消されていきますね。しかしいま 21 世紀にもう一回考えるとすると、幕府の歴史時間を含めて、どういう東京の中の歴史的空間というものを、(虚構でも良いから)構築するかという問いはあると思います。

司会 吉見先生、ありがとうございます。様々な論点を出していただきました。引き続き、近森先生からコメントを頂戴します。

近森 慶應大学の近森と申します。私は会員ではないのですが、このような場にお招きいただいてありがとうございます。

私の専門は文化社会学で、都市を一応扱ってはいるわけですが、どちらかというと都市論的なアプローチです。丸の内、美観問題にも全然詳しくなくて素人同然ですので、丸の内のエキスパートあるいは美観のエキスパートがお話くださったこと、重厚な研究をベースにしたご報告はひたすら勉強になったというほかはなくて、特に申し上げることは実はないわけですが、『無印都市の社会学』(近森高明・工藤保則編著、法律文化社、2013年)で書いたことに関して何かコメントをしてもらえればということでしたので、今回あえて文化批評的というか、あるいは都市論的というか、言ってみれば若干軽薄と言えれば軽薄な立場であることを自覚しつつ私なりのコメントをさせていただきたいと思います。

資料は「街の“つまらなさ”をどう考えるか?」という、ちょっと挑発的なタイトルにしてみました。現在、都市空間はどのように変容しつつあるのか、その特徴を言い当てる言説はさまざまあります。レルフの現象学的人文地理学では「場所性の喪失」と言ったり、人類学者のマルク・オジェは「非一場所の増殖、Non-Places」と言ってみたり、バルセロナの地理学者のフランセスク・ムニョスは「俗都市化」と言っています。あるいは建築家のレム・コールハースは「ジェネリック・シティ」ということを言います。ジェネリック医薬品というものがあありますが、「ジェネリック」というのは「ノーブランドの」「無印の」ということです。そしてニール・スミスの「ジェントリフィケーション」、ズーキンの「オーセンティシティの喪失、魂の喪失」という話、あるいは「テーマパーク化」、「再魔術化」、「郊外化」、「モール化」等々が、あるわけです。

これらをカテゴリー化すると、場所論、グローバリゼーション論、反大規模開発論、反ジェントリフィケーション、消費社会論、あるいは日本の文脈では、都市論と文化批評が交錯するようなところでの言説です。すべてを非常に荒っぽくまとめると、要は街がつまらなくなっていると言われているわけです。

どうつまらなくなっているのかというと、画一化論というのはわかりやすいわけです。街が画一化・均一化してチェーン店ばかりになり、個性やアイデンティティーが失われているとか、もう少しひねると、個性がありそうに見えながら、しかしそれは擬似的なものだということ。一見すると「個性的」な特徴をフィーチャーしているかのように見えながら、そのフォーマット自体は均質的である、都市間競争における差異化の論理によって演出される括弧付きの「個性」にすぎない、等々。

そうした批判的な言説、批判的な視点から見ると、丸の内というのは確かに一方では都市間競争を背景にブランド化戦略を取っている、あるいはモール化していると言えるわけです。そうすると、他のさまざまな都市と同様なプロセスをたどっているのしょうし、ムニョスの言えば俗都市化が丸の内でも展開していると言えるのかもしれませんが。しかしその批判の言葉というのは、ある種の空回りをしているとも言えると思います。つまりデベロッパーの側は、実は批判の言葉をあらかじめ先取りしている、あるいはあらかじめプログラムに組み込んで街の開発をしているわけです。

三菱地所による丸の内の「ブランド戦略」は2001年に策定されていて、以来「世界で最もインタラクションが活発な街」というものに向けた戦略がとられています。その中で三菱地所が2013年1月に出したパンフレットには、こういうことが書いてあります。「丸の内という街をひとつのブランドとして捉える必要があると考え……アジアの国際都市間競争が激化している今、丸の内のまちづくりを通じて日本の成長に貢献することが私たちの使命であり……世界から選ばれる街・丸の内として都市間競争

争に打ち勝ち……云々。」そういうわけでプログラムに、都市間競争の中でブランド化していきますということがあらかじめ書かれているのです。

一方、モール化という方向を見てみますと、確かにゼロ年代以降、大規模な複合施設が、丸の内ビルディングをはじめ丸の内周辺でいろいろつくられています。それは業務中枢とモールの商業施設の組み合わせという点においては、六本木ヒルズをはじめとする複合施設による近年の都心部再開発の常套手段の一環であるとも捉えられます。

しかしまた一方で仲通りのモール化も進んでいます。先ほども話が出てきましたが、これもデベロッパー自身がそもそも戦略としてやっていることです。98年から仲通りの路面店舗化に着手をしてきました。有楽町駅前ゾーンを一方の核とし丸ビルを中心とした東京駅前ゾーンをもう一方の核とした2核と、仲通りの連続路面店を1つのモール、つまりワンモールとする発想、「2核ワンモール」の考えの下、街の回遊性を高めるということを、そもそもプログラムの時点で言っています。

したがって開発戦略にはそもそも、これはブランド化だとか、これはモール化だという批判的な視点が組み込まれているわけです。あるいは言い方を変えると、分析主体と分析対象の共振関係というふうにも言えるわけですが、批判の言葉があらかじめプログラムに組み込まれているのです。そうするとむしろ批判の言葉というのは、それをただ単になぞっているだけ、あるいは後追いつているだけ、あるいは同語反復に陥ってしまう、あるいは批判があらかじめ無効化されてしまうのです。したがって都市論的には現在の丸の内というのはとても語りにくい、つまり批判がしにくい場所だと思うわけです。

開発主体自身がブランド化やモール化をそもそも意識的に実践しているわけですから、ある種の括弧付きの「つまらなさ」です。批判的視点が言うところのつまらなさはそもそも折り込み済みなのだと思います。「ブランド化、モール化というのはよくある手法だ、つまらない」と言ったところで、開発している側としては痛くもかゆくもない、そういう関係になっていると思われる。

一方、つまらなくなっているという言説には、ある種の本質論が潜んでいます。つまり、つまらなくなっていると言うからには、もともとのつまらなくない状態を前提にして、現状はそこから疎外されているという、ある種の疎外論の形を取るわけです。本来そこにあった「魂」が消えているとか、あるいはオーセンティシティが喪失しているということになるわけですが、例えばズーキンのオーセンティシティ論などは、それなりに危うさを抱えています。

ここで『Naked City』(シャロン・ズーキン著『都市はなぜ魂を失ったか』の原題)の話を書きますが、そこではジェントリフィケーションが悪者扱いされるわけです。高級化、再開発、均一化が行われて街なかに増えるのはカクテルバーとかスターバックスとかH&Mばかりだということ。洗練されてきれいな、都市自身の以前の姿を摸した「高価なレプリカへと変容」している。これは現在の丸の内を指した言葉としても通用しそうなフレーズだと思います。

その一方で、ズーキンが称揚する「懐かしく思うもの」というのはこういったものです。多様性が生で感じられる地域の外観や感覚、あるいはアートギャラリーやパフォーマンス・スペース、ストリートの独特な特性を形成する多様な地域からやってきた男女の顔や声、こうしたものが消えつつあると言うわけです。

しかし、その「オーセンティシティ」自体の定義は、『Naked City』を読んでも曖昧ですし、どうしても本質主義的なニュアンスが出てきてしまいます。「つまらなくなっている」という言説は、どこかにそうした本質論を抱え込んでいるケースが多いわけです。しかし「つまらなくなっている」系の言説の中で、その本質論の罫に掛かっているか、そこを戦略的に抜け出しているように見える視点を2つ挙げてみます。

一つはレム・コールハースの「ジェネリック・シティ」です。グローバリゼーションを背景として世界中に増殖する、無個人的でアイデンティティーや歴史を欠いた都市をジェネリック・シティと言うわけですが、ジェネリックだから駄目だとか悪いということ。コールハースは言わずに、ただクールに、新しく出てきた都市空間の特徴を記述していくというスタイルを取っています。

あるいはマルク・オジェの「非一場所(Non-Places)」です。これは具体的には空港とか、それこそモールとか高速道路などが挙げられるわけですが、要はただ通過される場所です。人がそこにとどまることのない場所です。フローの処理に最適化された空間だということです。しかしこれはオジェが使うときには疎外論ではありません。つまり場所性が失われて悲しいというような話ではなく、そもそも新しい、特異なありようの空間、非一場所というものがポジティブにあるという、そのおもしろさをきちんと受け止めようとしていると思われる。非一場所という特異なありようの空間が増えて、私たちの場所の感覚を組み替

えつつ日常経験の基礎を形づくようになっていて、その現状をある種ポジティブな相の下に捉えようとしているわけです。ジェネリック・シティとか非一場所をきっかけに「つまらなさ」を引き受けた都市論を構想できるのではないかと思うわけです。

ここで、かなり唐突に見えるベンヤミンの複製技術論を参照したいと思います。これは実は突飛なことではなくて、ズーキン自身がオーセンティシティの話をしているときにベンヤミンのアウラ論を参照しています。あるいはコールハースのジェネリック・シティの技術論はベンヤミンの複製技術論をベースにしているのではないかという話があって、つながりは実はあるわけです。

ベンヤミンは『複製技術時代の芸術作品』の中で、従来は複製技術というのはコピーとか薄っぺらの模造品をつくるだけと考えられていたものを、複製技術はそもそも芸術の受容様式を変更したのだ、芸術のあり方を変えたのだという言い方でポジティブに捉えています。それを複製的な消費装置と都市空間との関係に置き換えて言うと、通常チェーン店は街の個性を奪って均一化するだけというふうに考えられるわけですが、ベンヤミンが現在の都市空間を見たときに、どのように見るだろうか、ポジティブなところをあえて探っていくかもしれないという話です。

またベンヤミンはアウラなき芸術作品としての写真や映画をあえて称揚してみせるわけですが、オーセンティシティなき複製的な都市空間とその経験を、同じようにポジティブに評価することも可能ではないでしょうか。

ベンヤミンの複製技術論を参照するときに2つの方法が考えられると思います。つまり一方は彼の写真・映画論のような方法で、非一場所的なものがつくり出す新たな経験様式を検討するという方向性があり、もう一方はアウラにあえてこだわって見るということもあり得るかと思えます。アウラというのは、複製技術が消してしまうものだったわけですが、これはオーセンティシティの話と非常に問題構成が似ているわけです。

ジェントリフィケーションが消してしまったものが、いわく言いがたいオーセンティシティになるわけですが、しかし同時に本質化を回避したいというときに、どういう回路があり得るか、その手がかりはズーキンの議論自体に実は潜んでいます。ズーキン自身が、オーセンティシティには時間の概念が含まれるということをきちんとあるところで言っているわけです。一方では、ある特定の時期の文化的イメージを、ある種の絶対的な評価基準としてオーセンティシティを考え、かつ同時に世代ごとに異なる都市経験を持っていて、その世代ごとに異なる都市経験・都市体験に基づいてそれぞれのオーセンティシティがあるということも言っています。

つまり丸の内らしさで言うと、一方で絶対的な丸の内らしさみたいなものが提示されたとなると、もう一方で複数の丸の内らしさというものがあってもいいわけです。例えば先ほどのビルの保存の話ですと、高度経済成長期のビルに愛着を持つ人がいても当然いいわけです。そっちのオーセンティシティを感じる人がいても当然いいのです。

ですので最後にやはり、先ほどと同様に時間軸という話をしたいと思えます。オーセンティシティを問いつつ、その本質化を回避し得る方向性として、単一化してすべてを同じオーセンティシティで埋め尽くすのではなく、複数のオーセンティシティをすり合わせて共存させる可能性を考えるということがあり得るのではないかということ提起したいのです。これは杉平先生の保存・復元のばらつきの話とか、松橋先生の開発と保存の関係の話、そして中島先生の記憶と歴史の構築の話にもつながる話題なのではないかと思えます。

私のコメントは以上です。どうもありがとうございました。

司会 まず、吉見先生から提示された論点について報告者の方々がレスポンスするような形で総合討論を始めたいと思えます。

その前に、吉見先生の論点をもう一度簡単に振り返っておきます。3人の報告者それぞれへのコメントがあったかと思えます。まず、杉平さんは官と民が対立するはずなのに覚えてこないという問題提起をされたのですが、吉見先生としては、そもそも対立していなかったのではないかということでした。それに対して杉平さんはどう思いますかということが一つ。

それから、松橋先生へのコメントです。開発に対抗するものとして世論があったのですが、その世論の中心にはあったのは天皇ということでした。しかし、平成に入ったあたりでそうした論調が消えていったという内容に対するコメントでした。天皇の代わりに出てきたものは何だったかというコメントです。

中島先生へのコメントは二つあるのかもしれませんが。一つは、市民が関わってまちづくりや景観の話を進めていくときに、「足下」の部分では選択幅が出てきているのではないかということです。もう一つ、より重要な論点として、時間から空間へという問題提起を中島先生からしていただいたのですが、時間が記憶をリアライズする場合、具体的にどのように行われるのか、主体は何なのか、そのこともコメントの中に含まれていたのではないかと思います。

吉見 中島先生のお話は、要するにビジュアルな景観の話を超えて、使用、ユーザビリティというか、空間を使うという話があるのではないかということです。単にある情報とか、ある風景にアクセスできるだけでなく、自分たちでこの空間を使いこなしていくというレベルの話があるのではないかということです。

司会 これらの論点について、それぞれの報告者の先生方から、どなたからでもけっこうですので、レスポンスをお願いできればと思います。

杉平 吉見先生から私にいただいた質問は二点です。一つ目は、本来なら対立しているはずの官・民と言ったのに対して、別にもともと対立していたのではなく、初めから官民双方に保全と開発との両方の勢力があり、それで初めから矛盾を含んだ複合がこの地にはあったと捉えるほうがいいのではないかというお話でした。

実は官民協調とか官民対立というふうには私自身の報告の中で取り上げたときに、本当に官と民という言葉を使うべきかどうか迷いました。実際のところ、行政も民間企業群も決して一枚岩ではなかったことが、どの時点を取り上げてもはっきりわかっているわけです。開発推進派と保全推進派がたまたま、あるときには東京海上と東京都建設局、ある時期には三菱地所と東京都というような官と民であったということです。ただ、それを保守、革新の対立というふうに呼んでしまうと政治思想上の対立と見られてしまう可能性があったので、その言い方は避けて官と民というふうに申し上げました。

なぜ本来対立してしかるべきだと考えたかと申しますと、三菱地所側と東京都側の主張が、少なくとも80年代からは実質的に変わっていないからです。もちろん東京都の行政部局の内部、あるいは三菱地所の内部、あるいは世代によって、地位によって、意見の違うグループや個人があるのは間違いありません。ただ、文書として出されている計画や政策を見ると、ほとんど主張の内容は変わっていないのです。にもかかわらず、あのときは論争が起こって、いま起こらないのはなぜか、それが不思議なところでした。

それについては中島先生のご発表にあった協議ということ、かつてのような論争ではなく協議ということが、有効に作用しているのではないかと考えられます。ただ、これについては少し保留して、もう一つの「住民が不在の丸の内の街区の中では、誰にとつて、誰からのランドスケープなのか」ということについてお答えしようと思えます。

論争が起こる条件として「第1報告」の最後に申し上げたのは、それぞれに主義や主張のある主体同士が、自らの主張の正当性をパブリックなものに訴えることによって論争が起こることです。松橋先生のご報告によると、そこで市民が主体化する隙間が生まれるということだったのですが、それぞれの主体がパブリックなものに対して自らの正当性を訴えていく中で、美観という感覚的なものが持ち出されて、それによって論争が起こって、市民が加わる余地が生まれるわけです。

ただ、そこでパブリックなものに訴えるといったときに、ある時期においては天皇に対して畏れ多いとか、外国に対して恥ずかしいとか、そういった感情が広くあった時代にはそれがパブリックなものであったわけですが、そうでない時代には、そこには訴えることができないというだけの違いなのではないかと思っています。十分お答えできたかどうか分かりませんが以上です。

松橋 私のほうからは主に三点目のところですかね。いわゆる中心性というものを考えるにあたり、住民なき丸の内の景観というのは、空間の準拠軸として皇居との関わりや東京駅との関わりにおいて、丸の内の「都市の意味」とでもいったらいいでしょうか、そういったものを定義する営みが絶えずくっついてきていました。

その丸の内のある種の特異性、アイデンティティ、中心性というものを支える一番大きかったものは、戦前の段階において

は天皇制的な何かであったことは間違いなさだろうと思います。それらの「天皇制的なもの」を経由しながら、グローバルなさまざまな要素が「翻訳」されて日本的な形に土着化していきます。こういった中において和洋折衷的な、あるいは日本のものの独自性を目指す景観づくりが戦前の日本、特に丸の内においては進んできました。

それが戦後に入って相対化され、天皇制というフィルターを経由しないあり方というものがあるようになってくると、とりわけ東京の都心部においては、都心というものが地域の中心であるというより、国の中心だとか、そういったものが複層的に重なっているという意味合いが非常に強まるわけです。その中で東京の中心性とは、とりわけ1980年代の東京駅の保存運動くらいまでは、そこに行き来する人たち、あるいはメディア等を経由して記憶している人たち、さらにそこで長年働いている人たちが、自分たちの空間として「領有」することを通じて意識されるものでした。

以前、東京駅の保存運動に関わっていた多見貞子さんが実際におっしゃっていましたが、至る所で発信されていますが、保存運動の一番のきっかけは皇居前の外苑から見える空を守ることだと。先ほどの「利用」や「使用」の話ともつながっていますが、要は自分たちの空間を守るということで、まさに「景観」は「利用」をするといった立場から関わってきたものの積み重ねとして現れます。そうした営みがナショナルな中心性というものの上に立ち、訴求力を持ったのが東京駅の保存運動ではないでしょうか。

それが90年代、2000年代に入り、よりグローバルな資本の空間と結びつきを強めていく中において、伝統とか国際規範というのは、まさにグローバルな資本への「翻訳可能性」が高いものがさまざまな形で選択されているのではないかと、というのが個人的な見解です。

それと報告では飛ばしたのですが、基本的に今日の東京の都心部というのは、山手線の内側くらいを一体的に捉えています。東京圏は三環状の内側全体を指し、その中での分業体制がベースになります。都市間競争の話との関わりでいうと、丸の内はそういう流れの中で歴史的、文化的な部分を保存しつつ、それを生かしながら開発を推進してきました。とはいえ、開発を通じて「翻訳可能性」の低い部分が置き換わっていく中で、長年働いている人にとっては見慣れたものがどこかへ行ってしまふので、当然そういった場所に愛着は生まれません。どこも同じような空間が広がっていく中において、そういう部分を大事なものとして、訴求力がある形で残していけるかという、ちょっと難しいものがあります。そこにこそ、今日の景観を語る難しさが出ているのではないのでしょうか。

中島 吉見先生からご指摘いただいた二点とも、論争をするという形ではなくて、その通りだなと思っています。今日1枚目に出したような写真(丸の内仲通りの歩行者天国に設置されたピストロチェア)は、ある意味ではどこでもある風景ですが、いままでの仲通りにはなかった風景で、仲通りを本当に人々がいろいろな形で使えるようになるということで私は比較的ポジティブに捉えています。

一つは、特に外苑前とか皇居前広場を考えると出てくる、公共性の問題です。公共とは何か、公園の「公」とは何か。そういう話の中で、いままであまりにも「基本的には誰のものでもない空間」をつくってきたわけです。非常に厳しい規制が掛かっていて、とにかく公園というのは少しでも人々と個人的な結びつきをつくってはいけないというか、「誰かのもの」とした途端に駄目になるということがあったのです。

ただ大きな流れの中では、いま都市の公共空間をどう使っていくかということで、空間の良し悪しと言うよりは、そこで生み出される人々の活動の豊かさが注目されています。それをわれわれはパブリックスペースではなくてパブリックライフだと言っています。その活動というの、単なる賑わいでみんながわいわいやるといっただけではなくて、一人で佇んでもいいし、いろいろな人の要求や生活のスタイルがあるので、それに対応できるようなものが求められます。われわれは人のライフそのものはデザインできないのですが、そういうライフが生み出される可能性を左右することは空間的ないろいろなデザインによってできるので、そういうことを考えているということです。

この問題は、実は丸の内だと少し付け加え的な話に聞こえるのです。実際、日本の丸の内以外では、いまストックをどう使うかという時代なので、まさにいままでつくってきた道路や公開空地をどうするかが問題なのです。これは丸の内のレベルとは全

く違って、人々がどう使うかという話になるわけです。だから、まさにおっしゃるように、われわれの関心がそちらに移っている中で、もう一回丸の内に立ち戻って考えたときにどうなるかという議論をさせてもらったということです。

もう一つ、景観の時間軸の話は近森先生のお話の中で、ある程度答えが出ている気がします。つまり個人で記憶や歴史は違うのです。私は都市の記憶力と呼んでいますが、記憶力が豊かな空間をどうつくるかということを考えると、やはり多様な時間がしっかりと残ることが大事であって、全体としてはそうなのですが、いま一番わかりにくいというか、このままで行くとなくなってしまうようなものは、やはり戦後のものだと思っています。

特に戦後の高度経済成長期の安普請というか、逆に言うと、いままでの文脈を壊してきたと言われているような建物たち、例えば赤煉瓦を壊して建てた丸の内の建物や有楽町の再開発のビル、あぁいったものの価値をいま議論しないといけません。かつて近代建築や町家が消えていったときには、そうしたものを評価するにはもう遅すぎたという、その失敗をもう一回繰り返すこととなります。

だからそういうことを繰り返さないためにも、多様なものを残すのは大事ではありますが、その中でも特に戦後のものはケアしなければいけません。もちろん幕府の記憶もとても大事なのですが、そういう高度経済成長期にできたものも残せるのなら残したいので、それらをどのような観点で評価できるのかが問題です。多様なものの中で特にどれが大事という選良主義でいいのかどうかということも含めて議論をしたいと思っています。

丸の内の中には、実は50年代、60年代の建物であっても、非常にシックで良いビルがたくさんあります。あれが全部なくなるのは丸の内の記憶力という意味でいくと非常にマイナスではないか、そういう議論を丸の内に関してはやりたいという気がしています。

吉見 すばらしいお答えをいただきありがとうございます。いまの中島さんのお話を聞いて言うと、丸の内がおもしろいのは、丸の内という空間が内在させている時間性というのが近代国民国家、ネーションステートとしての日本の時間だからです。あの場所は、地域の時間よりも国民国家の時間に直につながっている空間なのです。

そうすると丸の内の空間の景観の問題をどう考えるかという話は、近代国民国家の時間をどう考えるかという話と直につながっている話ですし、それをある種の奪用というか、ピストロチェアを置いて別の使い方をするというのは、かつて1970年の新宿西口地下広場でそれができなかったことですね。それをもっとポストモダン的な文脈で考えていく必要があります。そういうふうの意味付けると、丸の内という場所を問題にすることの意味は、大いにあるのではないかと思います。

最後に景観の問題で、いま中島さんは戦後の話をされましたが、もう一つ、この丸の内とは少しずれるかもしれませんが、東京における景観の問題として考えておく価値があると思うのは、東京の中での戦争の記憶の問題だと思います。広島や長崎、特に広島などでは、原爆の時間というものをどう象徴化していくかということが都市づくりそのものに全面的に関わる構造になっています。しかし東京の場合には、割とそれが見えません。1945年3月10日の東京大空襲の風景というのは、東京の風景の中には見えてきません。もっと見えないのは1868年の上野戦争です。薩長との戦いで上野が焼け野原になっているわけですが、これも見えません。見事に消し去られているわけです。

そうすると東京には見えない景観というのがあって、丸の内はその後にできた空間ということになります。それ以前にもあったことはありましたが、基本的にはそれ以後にできています。こうした戦争の記憶の見えない景観、あるいは戦争の景観。1868年の上野の風景とか、1945年3月の東京の下町の風景。そういった問題を都市の空間の中でどのようにビジュアライズしていくか、景観化していくかが問題となります。時間と景観というのはとてもおもしろい関係にあり、その問題まで踏み込んで考えると記憶論と都市論をつなぐことになるだろうと思っています。

司会 ありがとうございます。近森先生のコメントの最後のほうで、複数のオーセンティシティをすり合わせるなど、共存の可能性を考えていく必要があるのではないかと問題提起もなされました。これに関して、記憶をいかに可視化するか、保存するかという観点で、報告者の先生方から、ご意見等をいただければと思います。

杉平 近森先生のお話の最後の部分で、それぞれ異なる丸の内らしさがあって、それらが共存していくという可能性について、考えてみても良いのではないかとありました。確かにある種の人々から見てまがいものだったとしても、最近の丸の内への伸通りに見られる「文化」の匂い(出店の誘致や彫刻の設置、音楽祭の開催など)だとか、そういったものもある種の豊かさとして捉えられるかもしれません。例えば本物の歴史的建造物である八重洲ビルをつぶしてつくられた三菱一号館について、はっきりまがいものだというふうに批判する方もちよくちよくいちゃいますが、見ようによっては3Dプリンターか何かでつくられたお菓子の家みたいな感じで、あり得ない場所にあり得ない時間が重なっているというおもしろさはあるかもしれません。

ただ、それが意図的なものなのか意図せざるものなのかということは、多少違ってくると思います。というのも、それをつくった側が統一感とか象徴性ということをはっきり言っていて、それにもかかわらず、その自らの言葉に反するものをつくっているのだとすれば、それは確かに矛盾ではないかと思えます。ただ、その出来上がってしまったものをどう評価するかというのは、また人によっても思うところがあるでしょうから、それはまた別の機会にとします。

松橋 先ほど複数の「丸の内らしさ」というお話が出ました。私は2006年くらいに、再開発が終わった直後の丸の内、当時の全ての事業所(事業所の最上位者)に調査票をまいて、「あなたにとっての丸の内らしさって何ですか」という調査を行ったのですが、再開発前と後に入ってきた層のそれぞれの特徴が結構はっきり表れていました。

とりわけ行幸通りや東京駅に密接している2丁目、いま丸ビルなどが建っているあたりは、やはり開発前でも後でも基本的には東京駅と皇居のセット、それがすなわち丸の内だという形で答えている層が多いのです。ただし、別の質問項目を三重クロス(エラボレーション)まで組み合わせたときにその回答の内側に見えてきたのは、いわゆるグローバルな形の経済の活力があふれるような高層化の風景、それが揃っているのが中心軸線だという評価と、むしろ複数の時間が入り混じる昔ながらの歴史・伝統的な景観の方こそ中心的だという評価の混在でした。再開発以前から事業を営む規模の小さい事業所などからは、後者の回答がよく返ってきたように思います。

それに対して少し毛色の違うものも存在するのです。3丁目のほうの1960、70年代ぐらに入った事業所などの回答を見ますと、同時期に建てられたかなり均整の取れた街並みこそが丸の内を象徴するところだということで、時間性をめぐっては実際に働いている側の中でも違いが出ているわけです。ただそれが10年たって、先ほどの伸通りの例に象徴的に示されるように、あそこまで変わってくると、そうした時間の複数性が表に出るような機会ないし契機というものを見出し辛くなるのではないかと。先ほどの中島先生や近森先生のお話を伺いながら、そういうことを考えました。

中島 複数のオーセンティシティがあって、それをすり合わせながら共存するということがありますが、そのとき大事なのは、結局自分の立場を自覚するかどうかということです。というのも、自分が何に立脚しているのかという部分に、無自覚なのか自覚的なのかわからないところがあるからです。たぶんオーセンティシティを複数すり合わせるというような話は、自分がどういう歴史の中で生きてきているのか、自分が持っている時間軸とは何なのかというのが明確ではないと、できることではありません。あるいは単なる相対主義に陥るだけになるような気がするのです。

そういう意味では、都市にはどういう人間がいるか、それからやはり戦後だけではなく、東京、日本がどういうふうにいままでやってきて、いまどこにわれわれがいるか、そのことをしっかりとまず考える必要があります。その中で自分はいったいどういうふうな歴史観を持つのか、そういうふうな自覚をするのです。そうすると、たぶんその都市が空間のあり方についての手がかりを与えてくれる、そういう関係にあるのではないかと聞いていて思いました。

近森 記憶がいかに可視化されるかという話に関連して、痕跡とモニュメントという対立を考えてみたいのです。痕跡とモニュメントについて、僕が授業の中でネタにしている話の一つがあります。僕は慶應なので三田キャンパスの話をしていた

ですが、三田キャンパスの中にも昔のものがいくつも残っていて、その中にモニュメントがあります。旧図書館がモニュメントだし、福沢諭吉像もモニュメントです。図書館や諭吉像の前で写真を撮ったらず・慶應という形になるわけです。それは慶應の正しい歴史を表す象徴としてのモニュメントであるわけです。しかしそれは三菱一号館と同じく、どこから記憶の構築というか記憶の選択に関わっていて、現在の視点から過去を構築している慶應の正しいストーリーづくりに合致しているモニュメントなのです。

一方、キャンパスの中には痕跡と呼び得るものもあります。例えば、戦争の痕跡などもあります。ささいな例ですが、東門の近くに鉄の柵があり、その柵と土台の間隙がセメントで埋められています。なぜそんなことになっているかというと、戦時中に鉄の柵を供出して、戦後になって取って付けたように柵をつくりセメントで埋めたからです。そういったものは痕跡に当たるわけです。

痕跡というのは、正しい歴史や正しい物語からちょっとこぼれ落ちてしまうものであって、歴史の複数化、記憶の複数化につながるようなモメントとして働くように思われるわけです。ベンヤミンだったらそういったものを重視するだろうと思います。ある面で再開発されつつある丸の内というのは、正しい歴史の証拠となるモニュメントだらけになりつつあるので、そこで痕跡をいかに探して記憶をビジュアライズしていくかということがベンヤミン的には大事になるだろうということを最後に付け加えさせていただきます。

司会 ありがとうございます。十分に議論が出尽くしていないかとは思いますが、一応これでシンポジウムを閉じさせていただきます。最後までお付き合いいただきましてありがとうございました。